



## ラーバンの追憶

今週は、久しぶりにコンテンポラリーダンス劇場/学校、ラーバン (Trinity Laban Conservatoire of Music and Dance) でのお仕事でした。最近、ラーバンのプロダクションチームは、ごっそり人が入れ替わり、劇場の勝手をよく知っているテクニシャンが足りないので、緊急でサポートに入ってほしいという電話がかかってきたのです。カンドゥコーダンスカンパニーが新しいツアー演目を作るので、その照明プログラマー兼、ステージマネージメントをしてほしいとのことでした。

数年前にもエッセイに書かせていただいたと思いますが、私は10年前 (Oh my god!) にロンドン大学を出てすぐ、ここラーバンの劇場でテクニカルチームの見習いとして1年間、働かせていただきました。ラーバンは、ヨーロッパでは名の知れる、一流コンテンポラリーダンス学校で、パトロンは、エリザベス女王の従兄弟であるエドワード王子だそうです (実際に彼が公演を見に来るところを見たことはありませんが…)。その建物の中にある劇場、ボニーバード劇場は、学生の公演もやりつつ、プロフェッショナルのダンスカンパニーも来る、レシーピングシアターとしても運営されています。ランダムダンスカンパニー、アクラム・カーン、マイケル・クラーク、カンドゥコーカンパニーなど、たくさんのダンスツアー公演が、作り込まれる場所でもあります。ダンス好きにはたまらないですね。

振り返ってみると、私が今まで働いたことのあるロンドンの劇場の中で、一番 (潔癖性かというくらい) 綺麗で、オーガナイズされた劇場といっても、過言ではないでしょう。年に1回あるメンテナンスシーズンでは、劇場内のすべての吊り込みがバラされ、根こそぎ清掃、徹底的にメンテナンスされます。当時、見習いを始めた頃は、まず地味な作業が多かったのですが、今考えるとその経験が、舞台人としての大事な基礎知識と

精神を養ってくれたと実感します。

懐かしいラーバンでの地味な作業ナンバー5、第1位-40本ほどのサバトンを吊り下げるワイヤーのネジを、1つずつトークスパナで締めては記録メモを取っていく作業。果てしない闇の向こうに〜♪とミスチルを歌っていたのを覚えています。第2位-PAT test (Portable Appliance Testing) は、劇場すべての機材のアース、電力負荷、ダメージのチェックを年に一度しなければいけないという、イギリスの電気機材の規定です。灯体はもちろん、電気/電子系機材、ケーブル(プラグの中まで)もチェックし、合格マーク(日付とテストした人のイニシャル付き)を付ける。たまにメンテで忘れ去られていた機材が劇場内で出現し、数年前の日付や自分のイニシャルマークを発見しては、「おー!」と懐かしむ声が聞こえることもあります。第3位-綱元のカウンターウェイトを綱に載せては下ろし、灯体の重さ感覚をつかむトレーニング/筋トレ。体力に自信のある自分でもキツかったです。第4位-インカム消毒。第5位-使用済みの色の山の仕分け。この作業は、新しい色を発見できたり、色ナンバーの予想をしたり、はじめのうちは楽しいものです。あえてこのランキングの中に、灯体磨きが入らないのは、清麗なる儀式的行為へのリスペクトがあるからです。

ここ数年は、なるべくデザインのお仕事を優先させていただいているので、ラーバンでテクニシャンとして働くのはとっても久しぶりでした。数年の間に、人も機材も新しくなっており、新しいシステムを見つけては、今年の見習いさんに教えてもらったりしました。毎年2人、見習いを雇うこの劇場は、下手に大学に行くよりも断然、勉強と身になる場所だと思います。照明はもち

ろん、音響、映像、ステージマネージメント、綱元を、働きながら実践で学べるからです。照明デザイナーでも、照明以外の要素を理解できるということは、物作りのうえで強みになると思います。音響や映像の技術的なことがわからなくても、もちろん素晴らしい照明は作れると思いますが、彼らのアプローチの仕方を理解できることは、決して損にはなりません。理解しているからこそ、照明で手助けできることもたくさんあると感じます。とは言いましても、音響の「ん」の字の触りしかわかっていない者が、偉そうなことは言えません…。

私の日本の大先生は、暗黒舞踏の音楽家/照明家で、このあたりの考え方は、先生から影響を受けているのだと思います。(組織が性に合わないという先生のことなので、あえてお名前は挙げません。)直感と愛で物作りをされる先生のスタンスは、すべての要素と人が1つになって完成するというのを、常に念頭に置いていらっしゃいます。劇場の清掃員もその一人です。一人でたくさんのごことをこなす彼は、音と明かりとダンスの関係性に、力を、いや人生を注いだきた偉大な方です。

話は逸れましたが、ラーバンは私にとって、親しみのある第二の先生/母校です。今では、働くジャンルを広げて、劇場外で働くことも多くなっていますが、ラーバンで働くといつも初心に帰れます。舞台裏で公演を見守りながら、走りこんで来るダンサーの勢いと、しなやかにシャープな緊張感を間近で感じていると、忘れかけていたコンテンポラリーダンスの面白みと熱気が、一気に蘇ってきました。



ラーバンのボニーバード劇場



ラーバンの外見